

日本庭園が芸術であるためには、世界基準にかなう造形性と抽象性の視点で考える

庭園の芸術性を考える際には、造形の抽象化度を判定基準として考慮したい。ここでは以下の1~3段階に大別し、さらに各項目を①②に細分化した。以下にその全体像を示す。

1 抽象化度による庭園の区分の定義と概念図

1・1 具象的造形

- ①自然の中にある庵・東屋の風景（自然そのものを眺める田園風景）
- ②箱庭的に自然を模倣した造形（自然の要素を取捨選択せずに、あれこれ取り込んだ造形）

1・2 象徴的造形（自然の風景をデフォルメした、やや抽象化された造形）

- ①自然風景のデフォルメ（表象化）した造形（例えば荒磯・洲浜、遣水など）
- ②神話・仏典の物語を視覚化した造形（例えば蓬莱山・須弥山・極楽など）

1・3 抽象的造形

- ①人工的造形（重森の造形）
（自然の風景を高度に抽象（自然には無い直線や曲線）し、または物語の視覚化も具体的な造形を思いおこさない）
- ②完全な抽象造形（自然の風景と関係ない龍安寺の世界）

2 抽象化度と造形の完成度に関する概念図

日本庭園の造形は具象的造形から象徴的造形を経由し、次第に抽象化した造形に推移した。さらに禅思想の影響もあってか抽象化された石組みは「空間構成美の庭」を完成させた。ただし、抽象化度の高い庭園は抽象思想を造形化することが困難なため、多くの日本庭園は下図に示したような象徴庭園の部類に属している。

